

を看破して日本最初の政黨内閣を組織せざる、蓋し侯のこれを爲すに躊躇するは例の「陛下の御諮問にも與る身柄」といふ俄大名的の似非見識と、提携したる政黨の跋扈跳梁を迷惑がるの畏怖心とに因るなる可しと雖も、大に不可なり、殊に政黨の跋扈跳梁を迷惑がるが如きに至つては、笑止千萬と謂はざる可らず、政黨なるもの、外に在つて之と提携せば、跋扈もす可く、跳梁もす可し、内に入つて之を駕御し、之を我物とせば、何の跋扈かあらん、跳梁かあらんや、嗚呼曩には樺山伯高嶋子等進歩黨を我物とし、之と親睦するの膽力無くして遂に自家の覆滅を來せり、伊藤侯たるもの、亦其轍を履み、中途二半の政策に安んずる時は、進歩黨は其正面の敵となり自由黨は獅子身中の蟲となりて、遂には己代治氏有造氏等一輩の策士の爲に押込隠居となるに至らん、余は國家の利益と、侯一身の名譽との爲に、侯に向つて切に一大英斷を促さざるを得ず、侯は到底ビスマルクに非ず、寧ろビールの故智に倣ふて換骨脱體し、超然主義の祖師一變して政黨内閣の開山たるに若かざるなり、

天 雨 粟 兮 鬼 夜 哭

物のみ加之渠れ滔々屬僚の徒大學出身の輩相率いて其下に趨走し意を承け旨を奉し夤緣依附して以て勞を憚らず屈を厭はざる豈特に其一時俸祿の優に甘んずる者ならん哉亦次を追ひ機を覘ひ一日台鼎一爵の肉を得んと欲するのみ而して薩長侯伯の此輩に於ける門生の情淺と爲さす下僚の契亦解し難き者有り一朝天下の大政を擧げて之を自由進歩の徒に委し屬僚輩をして其渴望する所の地を喪はしむ是れ決して薩長侯伯の能く忍ぶ所ろに非ざる也前に清浦君濱尾君の進みたる後に伊東君末松君の入りたる即ち是れ也林有造君の如き松田正久君の如き犬養毅君の如き尾崎行雄君の如き永年岸頭に立ちて蓬萊瀛洲を海上萬里の外に望むを免れずして止まんのみ且つ彼れ薩長侯伯の徒の政黨に於ける特に之を發縱し之を指使し以て其所謂超然内閣なる者を無窮に維持せんと欲するに過ぎず何を以て之を言ふ曰く前に板垣伯の内務大臣に入拜するや曰く自由黨員として之を迎ふるに非ざる也元勳として之を薦むる也と而して伯や謹慎即ち藉を脱し足を濯へり大隈伯に至りては其就職の所幸に己に黨中に列班せざりしを以て是くの如く煩を取るを免れたるや長薩權貴の黨人に於ける其名を忌むと此くの如き者有り而して是れ正に其實

博文館主人余に太陽雜誌を惠與せらるゝと久し余未だ一言之に贈る有らず義に於て宜しからず今朝坪谷善四郎君來りて寄を促す因て茲に余が國民黨を創倡する所の意を述べ以て責を塞くと云ふ

國民黨の本分

中 江 兆 民

今や自由進歩二黨在り而して別に一黨を創立す二黨に満たざる所有るは固より也惟ふに板垣伯大隈伯の長薩内閣と提携するや其旨趣は必ずしも悪からず二伯蓋し以謂らく長薩の根蒂牢として抜く可らず遽に純然たる政黨内閣を建立せんと欲するも得可らず如かず姑く彼れと連結し一二大臣を薦め二三局長地方官を推し其率ゆる所の議員を以て之を輔け彼れの驕心を得已れの圖謀を進め漸を以て混融して然後他日政黨内閣の地を爲さんにはと是れ正に維新前公武合體論の旨趣なり是れ俗論なり捷に似て實は迂なり巧速に似て實は拙速なり是れ藩閥内閣を無窮に延ぶる者なり天下志士の氣を倦ましむる者なり夫れ薩長勳舊彼れ其初め幕府と抗し萬死を出て、一生を得以て中興の業を賛立せし者其天下の利權を占有し大臣大將重爵厚祿特に彼輩握中の

を忌むが爲めなり然らずんば曩きに伊藤侯の内閣を組織するや其初め大隈伯に謀り旋や又板垣伯に謀れり自由進歩兩黨の相容れざるを知りて而かも且つ此くの如し侯の眼中自由黨進歩黨有ると莫し唯議會中孰れの黨の議員を利用せんと願ふに在るのみ是れ其深意太だ彰明較著なるものに非ず耶二伯にして之を知らずんば不明たるを免れず知りて而して且つ之を爲す其意實に悲む可き者有り非邪余故に曰く是れ俗論なりと巧速に似て實は拙速なりと

是故に余の國民黨を創するは提携の俗論を破りて政黨内閣の實を擧げんと欲する也是故に伊板内閣と云はず伊隈内閣と云はず他の長ど若くは薩と政黨との内閣と云はず皆之を踢翻し一進し再進し三四進し必ず政黨内閣を擁立して後ち已まんと欲す此くの如くにして三年に延かん天下は大物なり爲政は大事なり倦まず沮まず後來繼ぐ可きを爲さんのみ

今余や眇たる老書生爵位の貴有るに非ず祿俸の優有るに非ず官に履歷無く家に財賄無く其中を環視するに學と識と勇と智と無し唯一片自由を愛好する已む可らざるの念慮有るのみ之を以て生し之を以て死し貧乏を以

て資實と爲し質備を以て銀行と爲し一枝の筆を以て鎗  
 礮と爲し必ず薩長閩粵の内閣を打破し了りて然後板滬  
 聯立内閣若くは自家一黨の純然たる政黨内閣を擁せん  
 と欲す四千萬中豈若干數の志士無からん哉余をして里  
 閭に蹙軻し志を齎らして徒死せしむ我四千萬同産必ず  
 此くの如く不情ならざる也且つや天下の曠き人士の蕃  
 さ未だ自由進歩の二黨に策名せずして而かも時世に蒿  
 目し國事に紆念する者農や工や商や醫や法律の士や華  
 や士や政黨の田地尙猶ほ餘裕有り雖然此くの如く余は  
 懷抱を推開して廣く天下の人材を迎へんと欲するも而  
 かも白晝人に驕り暮夜權貴に乞哀し正人君子をして口  
 語を交ゆるを羞ぢしむる一輩の人物に至ては終に之を  
 謝するを免れざる也古德言へる有り曰く銀碗裏に白雪  
 を盛ると是れ國民黨の本分なり(二月一日稿)

# 外資輸入論

文學士 天野爲之

現今我國經濟社會の萎靡して振はざる所以のものは果  
 して何に原因する乎。世上種々の説を爲すものありと

資本欠乏の爲め一頓挫を生じたる場合なるに於てを  
 や、然らば則ち之を充實する策如何、曰く貯蓄を奨勵  
 すること、曰く外資を輸入することは是れなり。而して  
 夫の貯蓄銀行、勸業銀行、農工銀行、信用組合、生産  
 組合、購買組合等の諸制度を利用して以て勤儉貯蓄の  
 風を養ふこと實に今日の急務に屬すと雖も、其効果や  
 之を一朝一夕に収むる能はず、其速に効果を収む以て  
 焦眉の急を救ふを得るものは夫れ唯だ外資の輸入にあ  
 る乎。

然らば外資輸入の方法如何、種々なる方法は既に世に  
 公にせられたりと雖も、吾輩は此際政府の信用を以て  
 外資を呼ぶの最も適當なるを信する者なり。思ふに我  
 民間社會の信用は未だ大に外資を呼ぶ能はざるべきを  
 以て、政府が外債を募集するの外目下の急に應ずべき  
 良法なかる可し。財政當局者は往々にして論ずらく政  
 府の信用を以て外資を呼ぶは即ち人爲を以てするもの  
 にして自然の勢に反するの嫌なきにあらず、寧ろ民間  
 の信用を以て漸次に外資を呼ぶの穩當なるに如かず  
 と。是れ固より一理あるの説なり、若し他の事情存す  
 るなくんば外資は之を自然の輸入に任せ、漸々國內の  
 餘財蓄積して以て資本の供給をなすを順當となす。然

雖も、余を以て之を觀るに主として資本の欠乏に外な  
 らずと思惟するなり。抑も資本の欠乏は我經濟社會の  
 大患にして其歐米に及ばざるも實に此の一點に在りと  
 す。蓋し資本の事業に必要なは恰も石炭の蒸氣機關  
 に於けるが如く之れなくんば事業得て發達すること能  
 はざるなり。而して此資本は我れに足らずと雖も、彼  
 れ歐米に在ては餘りあり、即ち我れに渴するも彼れに  
 溢れり。我れや僅々數千萬圓の公債を國內に募集する  
 こと容易ならずと雖も、英國は數億圓の資本を外國へ  
 輸出して平然たり。嗚呼我經濟社會は今や此必要欠  
 可からざるものを欠く、是れ實に直接には我國經濟の  
 發達を妨害し間接には萬般の進歩を抑制する所以にし  
 て大に世人の注意を乞はざる可からざる所とす。國民  
 資本なければ龍も魚と變ず、國民にして資本あらば鼠  
 も虎と化す、資本にして充實せずんば良事業家ありと  
 雖も得て爲すなきなり。  
 此故に我が産業の發達を謀り、經濟上雄を萬邦と争は  
 んと欲せば、必ず先づ我國資本の分量を増加せざるべ  
 からず。資本増加せば金融求めずして潤ひ、金融潤へ  
 ば事業求めずして發達すべし。資本増加の必要なる是  
 に於てか燎々然たり。況んや今日は事業勃興したるも

れども今日の我經濟界には政府の力を以て成るべく速  
 に外資を輸入せざるべからざる一大理由の存するな  
 り。何ぞや日清戰役の爲め一億三千萬圓の公債を内地  
 に募りて不生産的に消費したることと是れなり。斯の如  
 く急激に而かも人爲的に巨額の資本を政府に吸収した  
 るが爲め、左なきだに資本に乏しき我經濟界は益々營  
 養不充分となりたるなり。故に此際外資を輸入するは  
 此理合せを爲すものにして即ち經濟界をして自然の有  
 様に恢復せしむるものと謂ふべし。若し政府にして之  
 を棄置きて資本の恢復を計らざらん乎、それこそ人爲  
 的の妨害を其儘に放棄し置く者にして經濟界自然の趨  
 勢に背くものと謂はざるを得ざるなり。  
 然らば外債募集の方法如何と云ふに三分五厘或は四分  
 利附十五ヶ年乃至二十ヶ年据置の公債を外國へ賣出す  
 に在り。而して此外資を如何に使用すへきやは是れ尤  
 も注意すべき問題なりとす。何となれば外資輸入の恐  
 るべきは之か使用の方法を誤るの虞にあればなり。吾  
 輩は此外資を以て内國債を償還せんと欲する者なり。  
 是れ政府が金融社會より借上げたる生産資本を更に再  
 ひ當初の所有主たる金融社會に返還して以て生産資本  
 の人爲的欠乏を補充するの道なればなり。